

第5章 大隅諸島・トカラ列島



藤平小田遺跡（南種子町）

第1節 先史・古代の大隅諸島・トカラ列島

鹿児島県は、南は沖縄本島のすぐ北にある与論島まで、南北約586kmにおよぶ県域をかかえている。南西諸島の九州側からの入り口に種子島を含む大隅諸島がある。ここでは大隅諸島とトカラ列島について述べたい。大隅諸島は九州島と奄美・琉球諸島の中間に位置し、文化的にも両者をつなぐ重要な位置をしめる。また遣唐使の南海路にあたると推定され、古代・中世を通して「道の島」として、大陸と列島の文化の架け橋となってきた。大隅諸島は種子島・屋久島・口永良部島・馬毛島などからなる。種子島はほぼ南北に浮かぶ細長い島で、最高標高が282.2mしかない台地状の低平な島である。屋久島は種子島の南西側、佐多岬の南方65kmの東シナ海の洋上にあり、周囲105kmのほぼ円形の島である。中央部に九州最高峰の宮之浦岳をはじめとする1,000mを越える山が30座以上あり、洋上アルプスといわれる。

口永良部島は、屋久島の西方約12kmの海上に浮かぶ火山島で、最高峰の新岳は今なお噴煙を上げ、島全体が溶岩や火山噴出物で覆われている。島の周囲は海食崖に囲まれているが、中央に小さな湾と低地がある。大隅諸島には広義には硫黄島・竹島・黒島・草垣諸島を含むことがある。

トカラ列島は屋久島と奄美の中間に位置し、約180kmにわたって点在する火山性の島々である。口之島から悪石島までの険しい地勢の北トカラと、小島から宝島までの平坦な地形で、サンゴ礁の発達した南トカラからなる。

種子島や馬毛島は四万十層群などといわれる新旧の第三紀層を基盤とし、現在上位から、鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰（約6,300年前）・桜島起源の薩摩火山灰（11,500年前）・始良カルデラ起源のA T火山灰と大隅降下軽石（24,000～25,000年前）・鬼界カルデラ起源の可能性を指摘されている種IV火山灰と種III火山灰などの火山灰が検出される。ちなみに隆帯文土器は薩摩火山灰の下位から出土し、細石刃核などもその下から出土する。その下約1mにA T火山灰と大隅降下軽石がある。その20～30cm下にややオレンジ色を帯びた褐色の種IV火山灰があり、約30cmの風化土壌帯を挟んで、さらに濃いオレ

ンジ色の種III火山灰がある。A T火山灰層から種IV火山灰層の間層は、立切遺跡では明瞭な黒色帯をなすが、横峯C遺跡では暗褐色を呈す。種IV火山灰と種III火山灰の間層は褐色のローム層である。さらに下位に「種II火山灰」「種I火山灰」「西之表テラフ」と続くが、いまのところは遺物・遺構は見つかっていない。一方屋久島は花崗岩体と古生代の砂岩・頁岩が主をなし、土壌の発達は良くない。アカホヤ火山灰が存在するところもあるが、花崗岩の風化土壌のみのところも多い。1990年代後半になって、旧石器時代と縄文時代草創期の遺跡が次々と発掘調査され、全国的に注目される地域となった。

1 旧石器時代

南種子町横峯C遺跡と中種子町立切遺跡は標高120mの複数の谷の谷頭にあり、同様な立地をしている。横峯C遺跡は30,000年以上前の種IV火山灰層を挟んで礫群が形成され、種IV火山灰層上下とA T上位で3文化層が存在する。礫群は7基検出され、石器は、敲石・磨石が顕著で、剥片石器が少ない。立切遺跡は種IV火山灰層の下から礫群・土坑・焼土・ピット状遺構が検出され、石器は局部磨製石斧・打製石斧・スクレイパー・使用痕剥片・礫器・剥片・磨石・敲石・砥石・石皿・石核などが出土した。上層からは種子島で初めて細石刃核が出土し、船野型細石核であり九州東南部地域の影響が考えられる。横峯C遺跡・立切遺跡とも石材は砂岩・頁岩を中心として島内で調達している。

横峯C遺跡の炭化材の樹種同定では、A T火山灰下位と種IV火山灰下位からそれぞれ広葉樹（散孔材）として、樹種ではイスノキの可能性が指摘され、立切遺跡の種IV火山灰下からもイスノキが炭化材が同定されている。種III火山灰やA T火山灰の上下からブナ科シイ属やマンサク科（イスノキ）の植物珪酸体が検出され、最終氷期を通して照葉樹林が分布したといわれている（杉山・早田 1997）。

これらの遺跡の発見は、従来の狩猟中心の旧石器時代の生業観から、「日本列島の後期旧石器文化の中には、植物の利用がかなりの比率で安定した形で存在しており、それはシステムとして、少なくとも日本列島南部においては、当初から持ち合わせてい

たものであることが明らかになっている。」として、南九州の様相は、地球規模で旧石器時代の生業を考える際に重要な役割を果たすことになる（藤本2000）といわれる。

A T層の上位から約1mの間層をもって薩摩火山灰が見られるが、その下位の細石刃文化期の遺跡として立切遺跡のほかに、西之表市湊遺跡・大中峯遺跡でも頁岩製（宮田2002）の細石刃核の調整剥片や細石刃核が採集され、細石刃文化期が存在することも明らかにされた。南種子町銭亀遺跡では、細石刃核の良好な接合資料も出土している。

2 縄文時代

草創期

草創期の遺跡はいずれも海岸を見渡せる台地上に立地している。西之表市奥ノ仁田遺跡は、太平洋を望む標高133mの台地上にあり、集石・配石遺構・土坑などが検出された。本県でも草創期の類例が増加している中で、種子島でも該期の遺跡が存在することが初めて明らかにされた。隆帯文土器は貝殻で文様を施す個性的なものを含め、棒・ヘラ・指頭で施文される土器など、いくつかの型式に分類できる。磨製石鏃・丸ノミ型石斧・磨石と石皿などが大量に出土し、植物性食料を中心とする生業形態と早い時期からの定住化が伺われる。鬼ヶ野遺跡は、草創期の住居跡が検出され、石鏃の完成品が300本以上出土し、未製品・石核・チップも多量に出土していることから、石器製作遺跡が考えられる。また、石斧の破損品とともに砥石もあることから、石斧の修復があったと考えられる。隆帯文土器が中心の土器型式は複数型式あり、時間幅があると考えられる。この時期の石器製作跡は類例が少なく、また種子島という島で需給関係や生産方法を考察できるので貴重である。三角山遺跡は標高240mの島の最高所に近い丘陵地に立地する。草創期は隆帯文土器を中心とする土器と、磨製石鏃や黒曜石製の石鏃が出土している。薩摩火山灰が種子島で初めて確認された遺跡である。2軒の竪穴住居跡が検出され、焼土跡が明確で、床付近に貝殻隆帯文が出土した。早期のものでは珧状耳飾が出土し、日本国内で最古級に属する。磨製石鏃が草創期から存在したことが、竪穴住居

跡を構築していたこと、黒曜石などの島外からの持ち込みが見られることがわかる。丸ノミ形石斧は、丸木船の製作に用いられたと考えられており、丸木船による海上交通が行なわれた。草創期の遺跡にはこのほかに中種子町宮田遺跡、南種子町横峯D遺跡などがある。

早期

中種子町園田遺跡は、標高120mの海岸段丘上に、薩摩火山灰の上位層を掘り込み層とした土坑から、神子柴文化の影響をうけたと考えられる一部磨製の石槍が埋納されていた。1本の完形品と3本の欠損品からなる。副葬品あるいは威信材として一括埋納された可能性もある。西之表市下剝峯遺跡では貝殻腹縁を押し付けて文様をつけた土器が出土し、下剝峯式土器とされた土器は全県的に分布している。そのほかに吉田式土器、轟A式土器が出土した。中種子町輪之尾遺跡は標高100mの海岸段丘の縁部に立地し、苦浜貝塚を見下ろす位置にある。縄文時代早期の塞ノ神式土器が多量に採集されている。苦浜貝塚では、貝殻条線文を地文とし微隆突帯を施す苦浜式土器が設定され、前期轟式土器の範疇で考えられていた。ところが横峯C遺跡の発掘調査を機会にアカホヤ層の下から出土して再評価され、鹿児島県内に分布する縄文時代早期の土器型式であることが明らかになった。縄文時代早期の貝塚として貴重である。

前期

前期については、西北九州から東シナ海沿岸を中心に分布する広域土器型式である曾畑式土器の出土が早くから注目されていた。東アジアにおける当該期の温暖で湿潤な環境が、外洋性漁労の活発化を招き、地域間交流を促した（宮本1990）といわれている。その範囲は西北九州と朝鮮半島の範囲だけでなく、九州の西南部も含めた広い範囲で、少なくとも上屋久町一湊松山遺跡が南のセンターとして機能していたものと考えられる。奄美・沖縄出土の曾畑式土器については、曾畑I式新段階と大差なく、西北九州からの直接的な影響（水ノ江1990）ととらえられる。

一湊松山遺跡では、多量の曾畑式土器が出土して

いる。その層位から曾畑式土器→曾畑系条痕文土器と展開するが、曾畑系条痕文土器と条痕文土器が併行する可能性がある。曾畑式土器の解体過程が明確化した遺跡である。また条痕文土器群が曾畑式土器に後続する段階が存在することが判明した。西之表市本城遺跡は西之表市街地の北方砂丘の小丘陵に立地し、曾畑式土器が出土した。種子島においてはじめて曾畑式土器が確認された遺跡である。中種子町千草原遺跡では轟式土器と曾畑式土器が出土した。曾畑式土器は海岸部だけでなく、種子島の中央部の高所にある中種子町京塚遺跡や三角山遺跡でも出土している。

中 期

下剗峯遺跡では、単節斜縄文を施した瀬戸内地方の船元系の土器が出土しており、沖縄との交流を示す室川下層式土器も出土した。中期前葉にも、活発な交流が裏付けられる。なお室川下層式土器については、前期末併行とされてきたが、出土例を検討した結果中期とする説が有力である（伊藤 1996）。同様に一湊松山遺跡で轟式土器とされてきたものは、中期の条痕系土器と考えられる。中種子町宮田遺跡では春日式土器が出土した。

十島村宝島の大池遺跡では轟式系土器・室川下層式・深浦式土器などの縄文土器と貝製品が出土し、前期から中期の時期に短期間であるが、繰り返し住んでいたことが伺われる。

後 期

この時期は、市来式土器が九州西半部から沖縄本島まで分布することから、海洋的な性格が指摘されてきた。種子島・屋久島では、最近の調査の成果から、膨大な植物性食料の加工具とされる磨石・敲石・石皿が多量に出土している。

西之表市浅川牧遺跡は市来式土器を主体とする。土坑が66基検出され、特殊な壺形土器が特筆される。磨石・敲石、石皿が大量に出土し、一湊式土器の住居跡も検出された。壺形土器は中種子町鷹取遺跡でも出土した。西之表市納曾遺跡は西之表市街地を見下ろす標高23mの海岸段丘にある。市来式に後続する納曾式土器の標識遺跡である。一湊式土器に伴う竪穴住居跡と納曾式土器に伴う平地式住居跡が検出

された。石斧・石錘・敲石・石皿等が多数出土した。

さて一湊式土器は、一湊松山遺跡で出土した土器を標識とするが、本地域を分布域とする極めて地域性の強い土器である。このほかにも一湊松山遺跡では市来式土器の包含層の下層から松山式土器が出土し、市来式土器に先行する土器型式とされている。

南種子町藤平小田遺跡は島間港を遠望する西海岸の標高50mの尾根上に位置し、配石遺構65基と大型配石土坑1基、大型土坑1基、集石3基（大型集石）などが検出された。配石遺構は磨石・石皿を組み合わせ、円弧状に配置される。市来式土器・丸尾式土器・一湊式土器・納曾式土器、装飾付壺形土器、台付皿形土器などと、石器は膨大な磨石・敲石・石皿類等が出土し、狩猟具はなく象徴的な遺物が出土しており、東日本でみられる配石遺構に似ている。屋久町横峯遺跡は市来式・一湊式土器を主体とする竪穴住居跡が約100軒確認されている。土器型式等から約300年間に次々立て替えられたものと考えられている。住居群のまわりを取り囲むように土坑群が確認され、これらの土坑群の多くに礫や石皿が入れている。石器は植物性食料の加工具が中心である。藤平小田遺跡や浅川牧遺跡などととも、これらの土坑が再葬墓の可能性もあり、今後検討を要す。

上屋久町口永良部島の城ヶ平遺跡では、市来式・一湊式・御領式などの土器が出土した。

晩 期

中種子町大園遺跡は西海岸のほぼ中央部に位置し、晩期の孔列文土器・組織痕土器・大洞C式系土器が出土した。土掘具としての打製石斧が16本出土している。朝鮮半島畑作文化の南下が伺われる。大洞C式系土器については、その系譜が課題である。

南種子町野大野A遺跡は島の内陸部の標高約170m強の海岸段丘の台地上にある。一湊式土器の単純遺跡である。2基の土坑が検出され、1号土坑は石皿・磨石を集積した土坑で、石皿・磨石のほとんどが加熱され赤変している。上屋があったものと考えられる。本遺跡出土の土器は貝殻を施文・調整にまったく使用してなく、一湊II式とIII式にあたる。十島村タチバナ遺跡は中之島の標高165mの南向き緩

斜面に立地する遺跡で、竪穴住居跡30軒・土坑14基と炉跡14基が検出された。石器は植物性加工具が大勢をしめる。遺構の切り合いが多く、島に暮らす人々の集住的傾向が伺われる。奄美系と薩南系と九州系の土器の組み合わせがあり、宇宿上層式土器が晩期土器と共伴した。黒川式・一湊式・宇宿上層式土器が出土し文化伝播や交流を考える上で重要な遺跡である。十島村浜貝塚では、縄文時代晩期の石囲い炉跡とこれを中心にした住居跡が検出され、宇宿上層式土器、黒川式土器、イノシシの垂飾品が出土している。

3 弥生時代から古墳時代

弥生時代の遺跡は少なく、未だに不明な点が多い。大園遺跡・下剝峯遺跡で前期から中期の、千草原遺跡・輪之尾遺跡で後期の土器片が散見できる。ただ九州島の典型的な弥生土器を伴う遺跡の発掘調査は行なわれておらず、弥生時代後期相当とされてきた上能野式土器は、その後中園氏らによって古墳時代とされた(中園 1988)。広田遺跡の報告書では、広田遺跡・椎ノ木遺跡出土の上能野式土器は弥生時代後期に、上能野遺跡出土土器は古墳時代でもっとも後出するもの、火ノ上山遺跡出土の上能式土器が中間ということの前後3型式に分かれる見解(甲元 2003)が出されている。弥生時代後期後半から古墳時代にかけて、特徴的な貝製品を副葬し、海岸砂丘を墓地として使用した、極めて個性的な埋葬がなされている。また、高塚古墳がない地域で、土師器の出現も明確でないなかで、ここでは弥生時代から古墳時代までの幅で遺跡を位置づけたい。

西之表市椎ノ木遺跡は、馬毛島の広く海岸を見渡せる砂丘に立地する。埋葬跡は、多量の貝製品・水晶・貝小玉首飾りなどを伴い、上能野式土器や磨石が出土した。人骨からは若い成年男性であり広田貝塚人骨に類似し、背筋力が極めて強く舟を操るに長けた人であったと考えられる。西之表市上能野貝塚は、上能野式土器が設定された遺跡である。鉄製釣針や広田上層式の貝符が出土している。合計12体以上の人骨が出土し、西海岸の埋葬跡である。

南種子町広田遺跡は、1957～1958年に3次にわたる調査により、貝符に「山」という字が刻まれ、こ

れが日本最古の漢字として著名な遺跡である。合計で埋葬遺構90か所、人骨総数157体を検出した。3層にわたって埋葬がみられ、埋葬遺構は覆石墓型式・配石墓型式・箱式石棺墓状のものがあり、上層の石囲いへとつながっていく。弥生時代後期から古墳時代の3～7世紀頃の年代幅が与えられている。下層の被葬者では、男女を別に装身具に2累系あるが、上層にいくにしたがって規則性がゆるむことや、膨大な貝製装飾品については、装身具と副葬品に用途が分けられる。貝符の分類・編年が行われ、貝小玉・貝輪の編年とも一致すること、貝符によっては2次葬に使用されたものがあることなど、詳細に検討され報告された。ガラス製小玉も分析され、インド・東南アジアを原産とする鉛ガラスのものが1点含まれることもわかった。形質人類学的な分析から、縄文人集団と類縁関係があり、食生活を示す安定同位体分析からは、広田人は稲を栽培し、ある程度その収穫に依存していたとされる。このように整理作業を通して、多くの貴重な成果が報告されている。

中種子町鳥ノ峯遺跡は、東海岸の砂丘に立地する。弥生時代後期後半から古墳時代初頭の埋葬遺跡である。覆石墓が特徴的で、土器・磨製石鏃7点、着装品としてガラス玉・碧玉製管玉・貝玉・貝符・垂飾・貝輪などが出土している。広田遺跡で明らかにされた埋葬形態の変遷に合致する。

上屋久町火ノ上山遺跡は、宮ノ浦の砂丘に立地し磨石・敲石類が多量に出土した。

火ノ上山遺跡をのぞいて、いずれも埋葬遺跡であり、今後も周辺遺跡との比較検討が必要である。貝製品については、木下尚子により弥生時代以来南島産貝の運搬に携わった集団がいたと位置づけられており、そうした人の生活に関わる遺跡の発見・調査が、今後の課題である。

4 古代・中世

古代・中世の遺跡についても、断片的である。南種子町西之の本丸丸田遺跡では、丘陵末端に古代の掘立柱建物跡が検出された。中世でも、大園遺跡では浜津脇の湊を見下ろす位置に掘立柱建物跡が検出され、藤平小田遺跡では島間港を望む尾根に掘立柱建物跡が検出された。上屋久町岡遺跡では、中世の

船着き場の跡が見つかっており、これらは「湊＝海上交通」の関連遺跡と考えられる。

中世山城跡として赤尾木城跡，島間城跡，楠川城跡などがあり，楠川城跡は平成13年から発掘調査されている。

十島村諏訪之瀬島切石遺跡では，14～15世紀初めからの祭祀遺構が検出された。中国の青磁・染付，ベトナム・瀬戸・肥前の磁器・陶器などからなる陶磁器が出土した。近世の住居跡や配石遺構も見つかっている。「道の島」といわれるにふさわしい遺跡の状況と思われる。

参考文献

藤本強 2000「植物利用の再評価－世界的枠組みの再構築を見据えて－」『古代文化』第52巻第1号
杉山真二・早田勉 1997「南九州の植生と古環境」

『月刊地球』19

宮田栄二 2002「鹿児島県の非黒曜石石材と産地」『石器原産地研究会会誌』No1

宮本一夫 1990「海峡を挟む2つの地域－山東半島と遼東半島，朝鮮半島と西北九州，その地域性と伝播問題」『考古学研究』37-2

水ノ江和同 1990「中・南九州の曾畑式土器」『肥後考古』第7号

伊藤慎二 1996「種子島出土の琉球系縄文土器」『南九州縄文研究』No10

中園聡 1988「土器様式の動態」『人類史研究』7

甲元真之 2003「I－2 遺跡の立地と歴史的環境考古学的環境」『広田遺跡』

(堂込秀人)